

グループ企業の会計システムとホテル

管理会計の実現方法

親会社主導でグループ企業共通の会計システム（以下、「グループ会計」という）を採用することがある。会計ルールを統一化し、連結決算の早期化が主な目的であり、グループ全体としてのメリットは多大である。ただ、異業種の大量データに対応するため、ホテル経理に携わる者からすると重過ぎるシステムとなる傾向にあり、月次の管理帳票など欲しいものが簡単に出力できなくなるが多い。

本稿では、既存の会計システムからグループ会計へ移行する際に、ユニフォームを始めとするホテル管理会計を両立させるための方法を考えてみる。

まずはグループ会計システムで試みる

グループ会計にはいわゆる ERP パッケージが導入される。調達、製造、販売、人事給与、財務会計などなど、企業活動のために必要な機能が盛りだくさんである。当然、管理会計の機能も備わっているため、ホテル管理会計が実現できないか検討する。確認すべきポイントは、

- ① 予算、予測の取り扱い
- ② 統計情報の取り扱い
- ③ アウトプットの柔軟性 (Excel など)
- ④ メンテナンスの権限
- ⑤ 費用対効果

といったところだろうか。

① 予算、予測の取り扱い

管理会計を標榜するのであれば、少なくとも予算予測の入出力は必ず備わっている。そこで、過去の実績や予算、係数設定などから自動的に予測値を計算してくれる機能などがあると便利だが、予約情報などオンハンドの数字をどのように反映させるかが悩みどころである。AI 技術が進歩すると面白くなる分野である。

② 統計情報の取り扱い

KPI の無い管理会計はその意味が薄れるため、こちらも普通は取り扱い可能のはずである。手入力は業務的に厳しいためできるだけ PMS 等とインターフェイスするよう検討したい。

③ アウトプットの柔軟性 (Excel など)

CSV や Excel へのデータ出力、社内 WEB での閲覧など、アウトプットの種類や方式をよく確認したい。既存帳票の Excel テンプレートを流用できると移行作業のハードルが下がりやる気も出る。

④ メンテナンスの権限

予算予測を管理して、統計が扱えて、オリジナルの管理帳票も Excel で出力できる。が、それらのメンテナンスは自社で行えず、

グループ会計を管理している親会社や関係会社に依頼しなければならない場合は運用上の障壁となる。管理会計は事業内容によりその手法が独自のものとなるため、各グループ会社でのメンテナンスを制限することは無いとは思うのだが、特にユニフォームなどは改訂毎に部門や科目、統計の増減や表示方法が変わるため、自力設定は重要となる。ホテル会計に疎い方に高い費用を払って設定を依頼、これは誰も得をしない。

⑤ 費用対効果

結局はこれである。①～④の全てが問題無くとも、その構築および運用コストが見合わなければ手作業で頑張ることになる。逆に、構築コストが幾分多めにかかったとしても、運用上のメリットが上回るのであれば検討の余地は十分にある。管理会計とは蓄積された情報やその加工結果を見て分析・判断するためにあるのだから、毎回決まった情報を集めたり切り貼りする作業は機械に任せ、人間はもっと賢い仕事をするよう心掛けたい。

さて、以上の確認ポイントが好ましい結果にならなかった場合はどうすればよいのか。

ダメなら別のアプリケーションで試みる

じゃあ仕方ないから手作業で・・・と決める前にもうひとつ検討して頂きたいことがある。グループ会計システムからデータを取り出し、別のカラクリに取り込んで管理会計を実現しよう、という試みである。

利用できそうなアプリケーションとしては

- ・ BI ツール
- ・ Excel や Access での作り込み
- ・ 管理会計専用アプリケーション

などがあるが、BI ツールの導入はデータベースを理解するスキルが、Excel・Access での作り込みはプログラマに近いスキルが必要となる。いずれも難しいようであれば管理会計専用のシステムを検討してみよう。システム選定では先ほどのグループ会計の確認項目に加え、

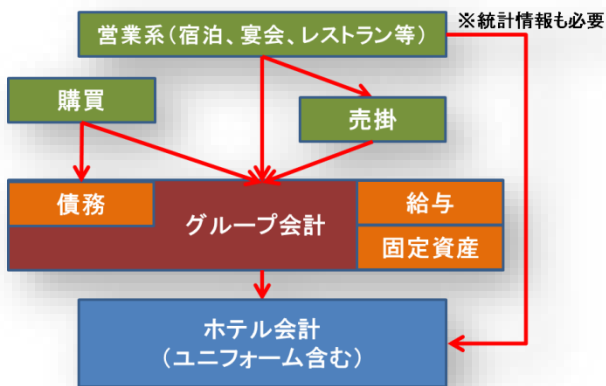
- ⑥ 各種データの取得元 (他システム連携)
- ⑦ 整合性の確認方法
- ⑧ システム会社の導入担当者のホテルに関する知識

といったことも留意したい。

⑥ 各種データの取得元 (他システム連携)

グループ会計で管理会計を行わない場合、統計情報をグループ会計に取り込んでいる可能性が低い。ということは PMS 等から取得する必要がある。どのシステムから何の情報を受け取るのか精査し、連携の可否を確認したい。宿泊のセグメント情報など細か

く管理したい場合は、管理会計側でデータ取り込みが可能な状態を目指す。基本的な情報を月次ベースでのみ必要とする場合は、手入力でも十分だろう。グループ会計から仕訳もしくは部門別の損益情報を連携する手段も忘れないように準備しよう。



⑦整合性の確認方法

グループ会計、PMS など複数のシステムからデータ連携するため、結果に漏れや食い違いが無いかが確認が必要となる。連携元のシステムが複数あるとコード体系が異なるため、管理会計側でコード変換を行うことも考えられる。このような状態でデータの不整合が発生すると、原因の追求が複雑になるので、安定するまでシステム会社の支援を得られるよう交渉しておこう。運用開始後はこの整合性チェックに長い時間を取られることになる。

⑧システム会社のホテルに関する知識

業界用語は一般人にとって馴染まない言葉であり、ハウスユース、コンプ、レブパー、エーディーアールと言われても何のことやら戸惑ってしまう。一般人と思われるシステム会社の導入担当者がホテル用語に詳しい可能性は低い。システムが良くてホテル用語も通じる状況が一番望ましいが、通じない場合は、IT 系のホテルコンサルタントに支援を依頼する手もある。業界用語が通じるかどうかで作業効率も変わるであろうし、ホテル側の指示ミスに気付いてもらえる可能性もある。

結局、最終的には費用対効果の話になるので、見合わない場合は手作業で管理会計のレポートを作成することになる。もしそうってしまった場合は、常に異なる視点を持って分析を行う機会を与えられていると考え、モチベーションを上げてレポートを作成しよう。

遠くない将来?

近年 AI 技術の発展が目覚ましく、クラウドの会計システムでは仕訳の自動起票機能など AI 機能を搭載しているものもある。単純な入力作業から自動化され、人間の業務は確認と承認が主となり、自動処理の正確性が人間を上回ると財務会計を行う部署が不要になるのだろう。一方、管理会計はどうか。こちらも AI 化により、現状に必要な改善点を予測し、関連する情報を自動的に抽出するような仕組みができると、今のようなユニフォームは業界内のベンチマークに過ぎず、運営に必要な資料では無くなるのかもしれない。AI 技術の動向にも注目していきたい。